

在宅領域における感染管理に関する研究の動向 —2007年～2014年の看護系国内文献から—

髙 ひかり¹⁾・徳重あつ子²⁾・横島 啓子²⁾・久山かおる²⁾

Research Trends on Home Infection Control from Nursing Domestic Literature 2007-2014

Hikari SHIMA¹⁾, Atsuko TOKUSHIGE²⁾, Keiko YOKOJIMA²⁾ and Kaoru KUYAMA²⁾

¹⁾Master Course of Former Mukogawa Women's University Graduate School of Nursing,

²⁾Mukogawa Women's University Graduate School of Nursing

(2018年6月4日受付・2019年3月12日受理)

要 旨

2007年CDCから公表されたガイドラインにおいて「院内感染」という用語は「医療関連感染」へと変更された。その背景には、在宅やケア施設での感染管理の重要性が増したことが挙げられる。また、同年改正された医療法では院内感染制御体制は整備されたが、在宅領域での整備は行われなかった。そこで、本研究では、在宅領域における感染管理に関する研究の動向について看護系国内文献での検討を行い、今後の課題について明らかにすることとした。2007年～2014年の期間で医学中央雑誌とCiNiiを用いて、「在宅」と「感染管理」「感染予防」「感染制御」「感染対策」のそれぞれの組み合わせでキーワード検索を行い、さらに「在宅」と「感染予防管理」の組み合わせでシソーラスによる主題検索を行った。抽出された文献から、総説、解説、会議録を除く論文33件を対象とし、掲載年次・掲載数、研究対象、データ収集方法、研究分類、研究内容を検討した。論文件数は1年あたり1～8件で2009年が8件(24.2%)と最も多く、研究対象は「療養者」27.7%、データ収集方法は「質問紙調査」48.6%、研究分類は「観察研究」75.8%であった。研究内容は「感染管理の基礎的技術」、「医療処置における感染管理」「組織的に行う感染管理」が多い傾向であった。今後はこれらの研究の蓄積と対象者数を増やしていくことが必要と考えられた。

Key words : 在宅, 感染管理, 文献検討

はじめに

感染症に関する研究の動向をみると、多くの手指衛生に関する研究¹⁾、手指衛生の実施率²⁾について報告されている。また、介護保険施設やICU等で人工呼吸器装着中の患者の肺炎予防のための口腔ケアや化学療法を受ける患者の感染予防法についての研究も多く、対象者は65歳以上の高齢者が大多数を占めている³⁻⁵⁾。この影響として考えられるのは、2007年に米国疾病予防管理センター(Centers for Disease Control and Prevention : 以下CDC)から公表されたガイドラインにおいて「nos-

comial infection(院内感染)」という用語から「healthcare-associated infection : HAI(医療関連感染)」へ変更され、この概念に拡大した背景には、高齢者などの免疫低下者の増加、侵襲的医療の発達、在宅医療や長期ケア施設での感染管理の重要性が増したことがある⁶⁾。

日本の感染対策は、CDCが、「病院における隔離予防策のためのガイドライン、1996年」において「標準予防策を基本にした新しい感染対策」を公開して以降、その影響を受けてきた。CDCにて「隔離予防策のためのガイドライン：医療現場における感染性微生物の伝播の予防、2007年」の変更以降、日本においても「病院感染」かわり、「医療関連感染」という用語が広く使用されるようになってきている⁷⁾。さらに、感染症領域におい

¹⁾元武庫川女子大学大学院看護学研究科修士課程、²⁾武庫川女子大学大学院看護学研究科

ては治療から予防へ変革⁹⁾、感染制御から感染予防へと焦点がシフトしている⁹⁾。2007年に医療法の改正を施行し、病院、有床診療所、歯科診療所、助産所のすべての医療機関は「院内感染対策のための指針」を策定することが義務となり法的遵守事項として位置付けられた⁷⁾。医療機関以外については、高齢者介護施設における感染対策マニュアルが2013年に公表されている¹⁰⁾。次いで、2014年7月には「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律（通称：医療介護総合確保推進法）が成立し、医療機関においては、医療機能の分化が進み、病院中心の医療から在宅医療、地域包括ケアシステムの推進に向けて舵が切られたことになる⁷⁾。しかし、在宅における感染症の現状や感染症対策の指標については、極めて情報が少ない¹⁰⁾。今後、75歳以上の高齢者数の急速な増加が予測される2025年の高齢社会問題を踏まえると、在宅における感染管理は重要な課題であり、看護としても取り組むべきテーマのひとつであると考えられる。

このような状況を踏まえ、在宅領域における看護職者が行う感染管理に関する研究の動向を把握する必要があると考えた。これまでの文献検討の報告は、川村¹¹⁾が、1985年から1994年までを対象にMRSA、一般細菌を中心にした在宅感染予防について、在宅看護に関する文献から論じている。その結果、筋神経系疾患（難病）患者を対象とする訪問看護分野からの報告が中心であり、次第に他の訪問看護分野にも研究が及び、感染予防に対する研究が始まった変遷や細菌学的調査研究法の必要性を指摘している。次いで、前田・滝内・小松¹²⁾が、在宅が医療提供の場として認められた第2次医療法改正の1992年から2006年までを対象に、在宅ケアの特性を踏まえた感染管理の確立を目指す上で必要とされる研究論文について検討しており、研究対象は「療養者」、データ収集方法は「細菌学的検討」、研究内容では「記述的研究」が66.7%と多く、分析的研究の充実が求められていた。研究内容は感染管理全般に関することが取り上げられていた。

そこで本研究は、1)在宅領域における感染管理に関する研究の動向を2007年から2014年までを対象に、看護系国内文献での検討を行い、2)在宅における感染管理の今後の課題を明らかにすることを目的に文献検討を行った。なお、本研究を2007年から2014年までを対象とした根拠は以下である。2007年がCDCのガイドラインの変更年であることと、先行研究において在宅領域における感染管理に関する文献検討の報告が2006年までであったことから、2007年以降を対象とした。また、感染に専門的に対応する看護職には、感染管理認定看護師（Certified Nurse in Infection Control：以下CNIC）がおり、2014年の教育基準カリキュラムの改正があった

ことと、2014年の「医療介護総合確保推進法」により病院中心から在宅中心へ医療がシフトしたことから、看護師が取り組む研究にも違いが生じる可能性を考え、2014年までを対象とすることとした。本研究は、在宅領域における看護職の実践活動に活用できるものであり、看護に貢献できると考え意義がある。

方 法

1. 対象文献

1) 文献検索方法

(1) 第1段階

2007年～2014年の期間でオンラインのデータベース医学中央雑誌 Web Ver.5、国立情報学研究所論文ナビゲータ（CiNii）を用いて、「在宅」and「感染管理」、「在宅」and「感染予防」、「在宅」and「感染制御」、「在宅」and「感染対策」の組み合わせでキーワード検索を行った。これは、前田・滝内・小松（前出）による『在宅ケアの感染管理に関する研究の動向と今後の課題—1992年～2006年の国内文献から—』の「文献収集方法」¹²⁾にて用いられたフリーキーワード「在宅」と「感染管理」、「在宅」と「感染予防」、「在宅」と「感染制御」、「在宅」と「感染対策」の組み合わせを選択した。また、文献検索方法において、学術学会誌と商業誌の文献を検索し、商業誌では査読を経た論文を対象とした。次に、対象文献の「選択基準」を①看護に関する内容が記述されたもの、②在宅領域における感染管理がテーマのもの、③論文種類は総説、解説、会議録を除いた文献とした。③の判断基準として、レビューを行うために必要な研究方法や結果の詳細な記述がされていないことから、「総説」、「解説」、「会議録」は除外した。

(2) 第2段階

抽出もれを防ぐために、「在宅」and「感染予防管理」の組み合わせでシソーラスによる主題検索を行った。抽出された文献から、看護に関する研究内容を、最終的に総説、解説、会議録を除く論文33件を対象文献とした。

2. 分析方法

掲載年次と掲載数は、1年毎に件数を集計した。研究対象とデータ収集方法は類似した内容毎に分類し、それぞれの件数を集計した。研究の手法は「観察的研究」と「実験的研究」に、さらに前者を「分析的研究」と「記述的研究」に分類し集計した。研究内容は、前田・滝内・小松による「研究内容」¹²⁾を引用し大中小項目に分類し集計を行った。

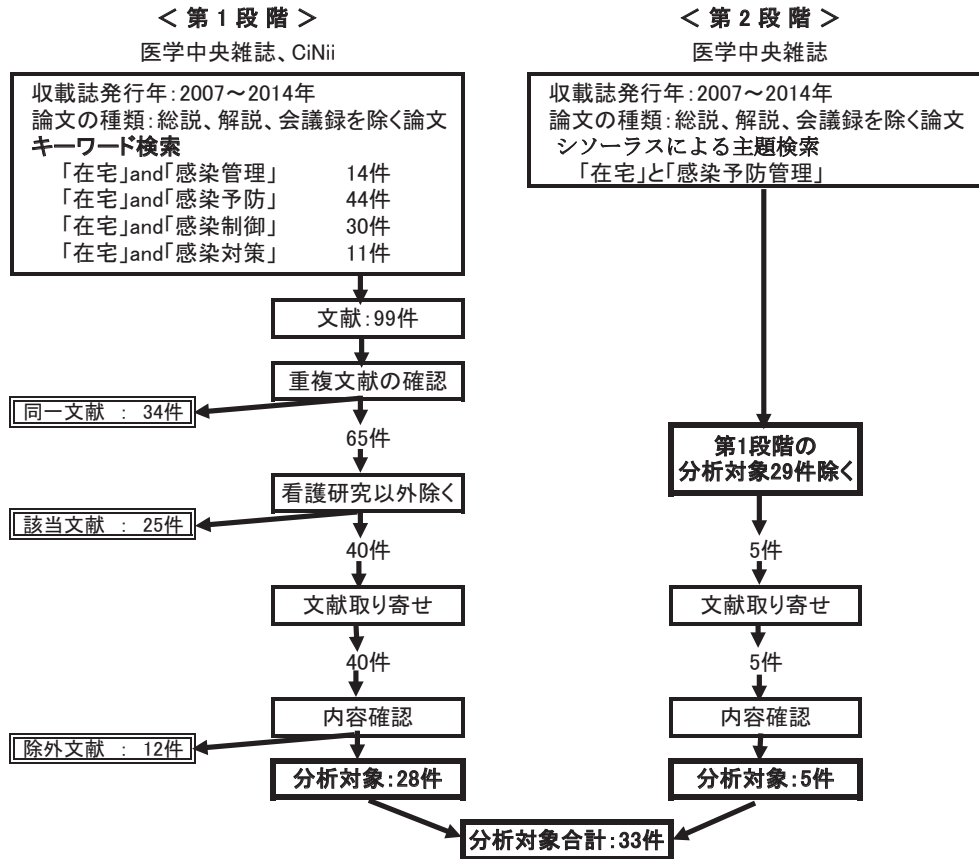


図1 文献検索方法と結果

結 果

1. 対象文献

1) 文献検索結果 (図1 参照)

(1) 第1段階

「在宅」and「感染管理」, 「在宅」and「感染予防」, 「在宅」and「感染制御」, 「在宅」and「感染対策」の組み合わせでキーワード検索を行った結果, 「在宅」and「感染管理」が14件, 「在宅」and「感染予防」が44件, 「在宅」and「感染制御」が30件, 「在宅」and「感染対策」が11件, 合計99件であった。重複文献の確認を行うと同一文献が34件あり, 対象文献は65件であった。それらの題目や要旨を含む書誌事項を確認し, 看護研究以外25件を除いた。その内訳は, 医師・治療に関する研究12件, 薬剤師2件, 歯科衛生士1件, 重症心身障碍児(者)入所施設1件, 保育園1件, 消毒装置の作成等医療機器4件, 看護学生対象4件であった。次に, 収集した40件を精読し, 本研究のテーマに該当しない12件を除外した。その内訳は, 入院患児対象3件, 入院患者の人工呼吸器離脱1件, 入院患者の在宅酸素療法導入1件, 呼吸器リハビリテーションがテーマ2件, 行動変容がテーマ1件, 消毒剤の検討1件, HIVに関する文献1件, 掲載年次「2006年」の文献1件, 「2016年」の文献1件で

あった。以上の結果より28件を分析対象文献とした。

(2) 第2段階

「在宅」and「感染予防管理」の組み合わせでシソーラスによる主題検索を行い文献の重なりを確認した結果, 第1段階の分析対象28件を除く5件が該当し, 文献を収集した。それらの内容を確認し, 5件を分析対象文献とした。

第1段階と第2段階を合わせて最終的に33件を分析対象文献とした。その概要を表1に示した。

2. 掲載年次・掲載数 (表2 参照)

2007年~2014年に掲載された論文件数は1年あたり1~8件で, 「2009年」が最も多く8件(24.2%), 次いで「2010年」が6件(18.2%), 「2008年」が5件(15.2%)となっており, 2007年~2010年にかけては増加傾向であった。2011年以降の論文件数は, 「2007年」3件を起点に100%とすれば, 「2011年」2件(66%), 「2012年」4件(133%), 「2013年」1件(33%), 「2014年」4件(133%)となっており, 2007年と比較して2013年は減少, 後は横ばいという結果であった。

3. 研究対象 (表3 参照)

「療養者」が最も多く13件(27.7%), 次いで「医療・衛生材料」が8件(17.0%), 「訪問看護師」と「家族(介

表 1 文献一覧

文献番号	種類	著者 文献番号 (発行年)	掲載紙巻 (号)頁	論文題目	研究目的	研究対象	データ収集/分類	結果・結論	課題
①	報告	小松妙子 ²²⁾ 滝内隆子 前田修子 (2007)	日本環境感 染学会誌 22 (1) 41-45	訪問看護従事者 の感染管理に関 する学習一学 習機、訪問 看護経験年数 による比較	在宅における感 染管理に関する 学習一学習機 を開発する。	訪問看護ステーションと 医療機関訪問看護部 (室)の訪問看護事業 者の訪問看護師193 名	質問紙調査/記述的研究	学習機のある者は67.9%。学習 方法はカンファレンスの割合が最も 高く、学習媒体は書籍が高かった。 学習方法への要望は研修会、学習 媒体への要望は在宅向けの書籍 が高かった。所属機関や訪問看護 経験年数の相違に関係がなかった。	所属機関の地域性や規模の把 握、諸条件が感染管理に関する学 習に与える影響の検討、訪問看護 事業者の感染管理に関する学習 内容の詳細な把握を行い、教育プ ログラムを開発する。
②	実践 報告	前田修子 ²³⁾ 滝内隆子 水島ゆかり 中山栄純 浅見美千江 (2007)	日本在宅ケ ア学会誌 10 (2) 91-98	在宅訪問看護師を対象とした 「在宅における感染管理 マニュアル」を作成し、A 県内の主要訪問看護提 供機関に配布し、本マ ニュアル内容に関する評 価を行う。	訪問看護師(管理者・ スタッフ)100名	質問紙調査/記述的研究	約9割が本マニュアルの存在を 知っている。うち9割は読んだことが あると回答。すべての項目で9割以上 が理解できた。8~9割以上が 役立ったと回答し、属性による相違 はなかった。追加した方がよい内容 として、中心静脈栄養や人工呼吸 器管理、感染症別感染管理が挙げ られていた。	感染リスクの高いケア技術や各 種病原微生物の特徴とその管理 方法を掲載する必要性。	
③	短報	工藤朋子 ²⁴⁾ 井上都之 (2007)	岩手県立大 学看護学 部紀要 9 97-101	在宅経管栄養注 入ルートの洗浄、 消毒に関する細 菌学的検討	在宅経管栄養法で実際 に行われている3通りの 洗浄・消毒方法につい て実験を行い、その細菌 繁殖状況を明らかにする。	注入ルートセット(栄養ボ トルと栄養セット):医 療・衛生材料	細菌学的検討/実験的研 究	B法で7日目までに細菌検出を認 めた。食器用洗剤だけでは安全な 再利用はできない。B法の部位別 検出細菌数では栄養ボトルの接続 部に認められた。洗浄・乾燥する必 要がある。C法が介護者の時間や 労力を軽減することができ、簡単な 方法といえる。	在宅療養環境で実際に使用した 注入ルートをを用いて検証し、患者が 安全に、介護者にとって経済的に 負担なく継続できる方法を提言し ていく必要。
④	原著	田嶋ひろみ ²⁵⁾ (2008)	第39回 地域看護 学2008年 30-32	長期気管カニ ューラ挿入在宅療 養者の呼吸器感 染を予防できた 要因として、一 家族介護者とそ れに影響及ぼし た因子	家族介護者の長期気管 カニューラ挿入在宅療 養者の呼吸器感 染を予防できた 要因を明らかにする。	介護者1 名	面接/記述的研究	面接・咽頭内 訪問看護など医療チームのサポー トは家族介護者の負担を軽減し、 在宅介護の継続に重要な役割を 果たしている。研究対象を広げ検 討する。	訪問看護など医療チームのサポー トは家族介護者の負担を軽減し、 在宅介護の継続に重要な役割を 果たしている。研究対象を広げ検 討する。
⑤	報告	前田修子 ¹²⁾ 滝内隆子 小松妙子 (2008)	日本環境感 染学会誌 23 (5) 350-354	在宅ケアにお ける感染管理 に関する研究 の動向と今後 の課題—1992 ~2006年の 国内文献—	在宅ケアにおける感 染管理に関する研 究の推移、研究内 容や方法を分析す ることにより、在 宅ケアの特性をふ まえた感染管理の 指す上で必要とさ れる研究について 解析する。	1992~2006年の15 年間に学術誌もく ろぎに学術誌に掲 げられた在宅ケ アにおける感染 管理に関する文 献69件	既存データ/記述的研究	1.1年あたり0~12件 2.記述的研究が66.7% 3.実験的研究が56.5% 4.対象は療養者が39.1% 5.細菌学的検討によるデータ収集 52.2% 6.研究内容は大中小項目に分類 され、実践方法の 確立を目指した研究内容が望ま れる。	今後は「記述的研究」で明らかに なった実態は「分析的研究」に発 展していくこと、量的データに合 わせて、「療養者や家族」を対象とし た面接や観察による質的データ の蓄積が必要。

表 1 文献一覧 (続き)

文献番号	種類	著者 文献番号 (発行年)	論文題目	掲載紙巻 (号)頁	研究目的	研究対象	データ収集/分類	結果・結論	課題
①	実践報告	前田修子 ²⁹⁾ 滝内隆子 小松妙子 (2009)	訪問看護師を対象とした感染管理の連携・指導に関する研修会の評価	日本在宅ケア学会誌 13 (2) 85-92	全12回から成る「訪問看護師を対象とした感染管理教育プログラム」の第4回「感染管理に関する関係機関・職種との連携・指導」と第5回「感染管理に関する療養者・家族への指導」研修会を開催し、評価した。	2ヶ所の訪問看護師18名	1. 事前質問紙調査の実施 2. 研修会の開催 3. 事後質問紙調査の実施	第4回は全18項目の修得度が事前30点から事後38点に、第5回は全17項目の修得度が、事前29点から事後40点に上昇した。両研修会は連携や指導に関する知識・技術を向上させる上で効果的であったと評価する。	第4回では訪問看護師自身は他職種に積極的に連携を図る知識・技術、第5回では精神運動領域における学習項目の修得度が低く、学習目標や評価方法を検討していく必要がある。
②	報告	前田修子 ³⁰⁾ 滝内隆子 小松妙子 (2009)	訪問看護師を対象とした「膀胱留置カテーテル挿入・管理」研修会効果検証	日本環境保健学雑誌 24 (6) 417-424	訪問看護師を対象とした「膀胱留置カテーテル挿入・管理」研修会を開催し、参加者の学習効果を検証した。	2ヶ所の訪問看護師20名	1. 事前質問紙調査の実施 2. 研修会の開催 3. 事後質問紙調査の実施	27項目の修得度は、事前修得度36点から事後修得度46点に上昇した。項目別では全項目の修得度が上昇し、【必要物品の列挙】以外の26項目で統計学的有意差がみられた。研修会は膀胱留置カテーテル挿入・管理に関する感染管理の知識・技術を向上させる上で効果的であったと考えられた。	修得状況があまり上昇しなかった項目は今後、教育方法の検討が必要である。
③	比較研究	滝内隆子 ³¹⁾ 前田修子 小松妙子 (2009)	訪問看護師を対象とした「感染対策に関する基礎的知識」研修会の効果検証—研修前後の修得状況を通して—	INFECTION CONTROL 18 (12) 1312-1321	「感染対策に関する基礎的知識」に関する研修会を開催し、研修前後の修得状況を明らかにする。	研修会に参加した2ヶ所の訪問看護師11名	1. 事前質問紙調査の実施 2. 研修会の開催 3. 事後質問紙調査の実施	4種類計16項目の5段階自己評価点が研修会後平均点の上昇が14項目に有意な得点の上昇がみられた。	データを積み重ねることによりデータの信頼性・妥当性を高めていくこと、修得度の定着状況を継続して調査しながら研修会の効果を検証していく。
④	原著	吉川幸子 ³²⁾ 大井登美子 中野貴美子 二藤紀子 高澤朋未 石黒浩史 安藤孝 その他 (2009)	在宅MDRP保菌者の感染防止対策—マニキュア作成の試み—	癌と化学療法 36 (1) 138-140	MDRP保菌療養者の在宅ケアにかかわり、療養者、介護者、ケア提供者共通のマニキュア必須性を感じ作成を試みたことで、その経過と意義について事例をおおして報告する。	患者・家族1例	事例研究 (既存データ) / 記述的研究	在宅で実践できるマニキュア作成(尿、便、痰、吐物で床を汚染しながら、在宅で実践できるエビデンスのあるマニキュア作り)に努力し、前向きな意見が出るようになった。在宅療養に拒否的であった妻も介護意欲が高くなった。	今後も院内や地域と連携、協力しながら、在宅で実践できるエビデンスのあるマニキュア作りを努力し、在宅ケアの質の向上をめざしていく。

表 1 文献一覧 (続き)

文献番号	種類	著者 文献番号 (発行年)	掲載紙巻 (号)	論文題目	研究目的	研究対象	データ収集/分類	結果・結論	課題
①⑨	資料	五十嵐久人 ²¹⁾ (2010)	山梨大学看護学会誌 8 (2) 39-44	訪問看護ステーションにおける感染管理対策の現状と課題	訪問看護ステーションの感染管理状況を把握する。	無作為抽出による585事業所の訪問看護ステーション長	質問紙調査/記述的研究	1 感染管理マニュアルが整備されている事業所は96.8%で、記載項目は手指衛生に関するものが最も多く、感染性廃棄物の取扱いが最も多かった。 2 利用者の感染症の有無の確認方法として「訪問看護指図書で確認する」が46.3%。 3 研修会等の開催・参加は72.8%であった。	医療機関や他の事業所との協体制も含めた対策の検討が必要である。感染症の有無について訪問看護ステーションが得やすい体制の構築を考えていく。マニュアルの活用状況や感染管理の取り組み状況を継続して確認していく。
②⑩	研究報告	池田由紀 ³⁶⁾ (2010)	日本感染看護学会誌 6 (1) 27-35	慢性呼吸器疾患患者の予防の検討	在宅で療養する慢性呼吸器疾患患者の予防に関する認識を検討し、感染予防のセルフマネージメント教育への示唆を得る。	慢性呼吸器疾患を持ち在宅で療養しているサボトグループに参加している患者11名	面接/記述的研究	「感染予防としてのどのようなことを行っているか」についてサブカテゴリとカテゴリに抽出。HOTS名、なし6名、気道感染の防御と気道感染への早期対処といった感染予防の認識を持っていた。	慢性呼吸器疾患患者の看護において、感染予防のセルフマネージメント教育に活用できる。
②⑪	原著	久留清美 ³⁷⁾ 丸山泰世 松浦奈緒 嶋飼由香 山田文子 宮木祐輝 (2010)	日本看護学雑誌 40 32-34	在宅に於ける代用膀胱洗浄器具の煮沸消毒中止の検討	在宅での代用膀胱洗浄器具の煮沸消毒程度に膀胱造設を行い、退院する必要があるのか、また水道水でどの程度清潔と指導を受け同意の7名、器具洗浄器具の清浄効果を検証し、より有効な膀胱洗浄器具の清潔管理を見出す。	細菌学的検討/実験的研究 1.6検体中煮沸消毒を行ったアイコノカテーテルのみ腸内細菌が検出。水道水のみで洗浄した器具、アイコノカテーテルからは検出なし。 2.アンケート結果から、器具の煮沸消毒を全員が行っていた。研究結果から、水道水のみで器具の汚れが落ちるまで洗浄するように指導している。	1.6検体中煮沸消毒を行ったアイコノカテーテルのみ腸内細菌が検出。水道水のみで洗浄した器具、アイコノカテーテルからは検出なし。 2.アンケート結果から、器具の煮沸消毒を全員が行っていた。研究結果から、水道水のみで器具の汚れが落ちるまで洗浄するように指導している。	今後多くのエビデンスを学び、検証していく。	
②⑫	資料	森みずえ ¹⁷⁾ 千田好子 狩山玲子 (2010)	北里看護学雑誌 12 (1) 38-44	在宅ケアにおける気管内吸引の長期管理に関する介入	気管内吸引を要する在宅療養患者の気管内吸引の浸透保障が実践可能な範囲で浸透液が汚染されず消毒効果が得られる状態でのカテーテルを管理する方法を検討した。	訪問看護ステーション利用の介護者3名と患者3名 対象に方法を指導・実践し6か月間の経過観察を行い、その効果をカテーテルの洗浄液と浸透液を指標とする	細菌学的検討/実験的研究 1.事前質問紙調査の実施 2.研修会の開催 3.事後質問紙調査の実施	①カテーテルの24時間交換②洗浄液と浸透液の別途作成③12時間毎の交換、浸透液の消毒濃度の遵守④エルソール2枚使用でのカテーテル清拭⑤洗浄液は30～50mL以上を吸引⑥吸引前後の手指衛生を徹底。結果、3例とも使用後の洗浄液・浸透液の生菌数・菌種とも月数の経過とともに減少した。	カテーテル洗浄方法や消毒剤の選択をさらに検討し、より簡便な方法へと改善する。
②⑬	報告/比較研究	小松妙子 ³⁸⁾ 前田修子 滝内隆子 (2011)	日本環境保健学会誌 25 (1) 41-48	訪問看護対象者の感染管理に関する在宅人工呼吸器研修会への参加効果	全12回から成る「訪問看護師を対象とした感染管理教育プログラム」の第12回目として『在宅人工呼吸器感染管理研修会』を開催し、学習効果を検証した。	医療機関に併設された2ヶ所の訪問看護ステーション訪問看護師15名 在宅人工呼吸器感染管理研修会」を開催し、学習効果を検証した。	質問紙調査/記述的研究 1.事前質問紙調査の実施 2.研修会の開催 3.事後質問紙調査の実施	知識・技術34項目の修得度の全修得度が低かった項目「在宅人工呼吸療法に関する知識・技術」の事後修得度4.1点に上昇した。項目別修得度は全項目において事後において上昇した。研修会は効果があつたと評価できる。事後修得度を評価できる方法を検討することである。	修得度が低かった項目「在宅人工呼吸療法に関する知識・技術」の事後修得度4.1点に上昇した。項目別修得度は全項目において事後において上昇した。研修会は効果があつたと評価できる。事後修得度を評価できる方法を検討することである。

表 1 文献一覧 (続き)

文献番号	種類	著者	文未 文献番号 (発行年)	論文題目	掲載紙巻 (号)頁	研究目的	研究対象	データ収集/分類	結果・結論	課題
⑳	原著	石川みづ子 ⁴⁴⁾ 玉城久美子 宮城裕子 (2013)		鳥しよに居住する在宅酸素療法患者の在宅療養の支援体制の検討	日本呼吸器学会・リハビリテーション学会誌 23 (1) 103-110	鳥しよに居住する在宅酸素療法患者の在宅療養の支援体制のあり方を検討する。	HOT 患者で先行研究のアンケート調査に協力得られた8名	面接/記述的研究	在宅療養に影響する要因を分析し、複数の離島のデータを集積し、検討した結果、7つのカテゴリが島々の地域性や医療機関の関わり方を明らかにしていく、抽出。1つに「体験から得た呼吸器自己管理法と上気道感染予防行動」が得られた。	
㉑	原著	阿部亜矢子 ¹⁹⁾ (2014)		在宅ケア関連感染症の現状と看護管理認定看護師	日本赤十字看護大学紀要 19 9-16	在宅ケアを提供する訪問看護事業所の感染予防に関する現状の調査をもとに、在宅ケア関連感染症(感染管理認定看護師)の役割の可能性を検討した。	訪問看護事業所及び感染管理認定看護師 (CNIC)	質問紙調査/記述的研究	68.1%の訪問看護事業所が感染情報提供の内容についての評価、訪問看護を利用する予定の患者の感染状況及び感染予防策について、積極的な情報提供と指導・助言を行う体制の構築を図る。具体的な要望は相談支援、研修実施で一致していた。30.8%のCNICは在宅ケアに関する知識不足を感じていた。	
㉒	原著	根城しずか ⁴⁵⁾ 杉山美紀子 出町知美 井上智佳 母良田郁子 古川照美 (2014)		在宅における経管栄養の洗浄・管理方法	保健科学研究 4 11-16	経管栄養の洗浄・管理方法について、在宅で安全・安価で効果的な洗浄・管理方法について検討するため、特にシリコンの洗浄・管理方法と細菌汚染の状況の関連を明らかにする。	簡易懸濁法による抗菌薬投与に使用したシリコン:医療・衛生材料	細菌学的検討/実験的研究	1.1日目から、毎日数種類の菌が検出。在宅環境下における総合的な安全性について検証する。洗浄、周辺環境、担う人の手指の清潔状況や汚染との関連について等が検出。	
㉓	原著/症例報告	大橋晃太 ⁴⁶⁾ 上笹田 鈴木崇弘 木之本景子 村上義彦 伊藤寿朗 その他 (2014)		病診連携・医福連携によって在宅医療でサポートした孤児性クロイツフェルト・ヤコブ病の1例	癌と化学療法 41 (1) 78-81	在宅医療・訪問看護師がインシアチブをとり、病診連携および医福連携により在宅看取りまでを完遂することが可能であった。	孤発性 CJD 患者 1 例	事例研究 (既存データ)/記述的研究	CJD 患者の在宅移行の経験を積み重ねることに加え、在宅療養で必要な診療指針が示されること、在宅療養の障壁を取り除くための洗淨、眼の保護、手袋・ガーゼなどの焼却処分を検討。排泄物、リネン類などの感染制御についての対応を行った。	
㉔	原著	金久美弥子 ⁴⁷⁾ 沖田登美子 高崎多恵子 福原香奈子 岩永房子 片山清美 (2014)		看護師における看護師の認知と利用状況の経年的変化	第44回日本看護学会論文集 2014年 305-308	看護師のCN(認定看護師)の認知や活用状況等を経年変化を分析し、看護師のニーズに応じたCNの活動への資料とする。	A病院看護師 CN (感染管理, WOC, がん化学療法, 訪問看護)	質問紙調査/記述的研究	「感染症対応」等で利用しているの細やかな相談体制やCNの理解は感染管理、「退院調整」や「在宅ケア」で利用しているのは訪問看護のCNで認知率が高かった。看護師が求めるCN活動は、感染管理では患者や症例等個別の看護実践の関わり、訪問看護では退院調整等のシステムの構築と活用であった。	

表2 掲載年次・掲載数

		n=33	
項目		件数	%
掲載年次	2007年	3	9.1
	2008年	5	15.2
	2009年	8	24.2
	2010年	6	18.2
	2011年	2	6.1
	2012年	4	12.1
	2013年	1	3.0
	2014年	4	12.1

表3 研究対象

		n=33	
項目		件数	%
研究対象	療養者	13	27.7
	医療・衛生材料	8	17.0
	訪問看護師	7	14.9
	家族（介護者）	7	14.9
	訪問看護管理者	4	8.5
	訪問看護ステーション・事業所	2	4.3
	在宅環境（生活物品）	2	4.3
	介護関係事業所・従事者	1	2.1
	感染管理認定看護師	1	2.1
	病院に従事する看護師	1	2.1
	その他	1	2.1

注 データは重複回答

護者）」がともに7件（14.9%）であった。なお、研究対象が複数の種類を対象に実施している文献があるため重複集計とした。

4. データ収集方法（表4参照）

「質問紙調査によるデータ収集」が最も多く17件（48.6%）、次いで「細菌学的検討によるデータ収集」が8件（22.9%）、「観察によるデータ収集」が1件（2.9%）、「面接によるデータ収集」が5件（14.3%）であった。なお、データ収集方法が複数の方法をとっている文献があるため重複集計とした。

5. 研究分類（表5参照）

「観察研究」が25件（75.8%）、「実験的研究」が8件（24.2%）であった。

6. 研究内容（表6参照）

表6の各項目の抽出文献を、文献一覧（表1）の文献番号で示している。

1) 研究内容の大項目

大項目を7つに分類した。「感染管理の基礎的技術」と「医療処置における感染管理」が最も多くそれぞれ20件、次いで「組織的に行う感染管理」18件、「連携・調整」13件、「感染症別感染管理」10件、「感染管理の基礎的知

表4 データ収集方法

		n=33	
項目		件数	%
データ収集	質問紙調査によるデータ収集	17	48.6
	細菌学的検討によるデータ収集	8	22.9
	観察によるデータ収集	1	2.9
	面接によるデータ収集	5	14.3
	既存データによるデータ収集	4	11.4

注 データは重複回答

表5 研究分類

		n=33	
項目		件数	%
研究分類	観察研究	25	75.8
	実験研究	8	24.2

識」5件、「在宅療養における感染管理」1件であった。

以下に、大項目の上位3項目の中・小項目の結果をまとめた。

(1) 感染管理の基礎的技術

大項目で多かった「感染管理の基礎的技術」は、中項目「手指衛生」6件、「消毒・洗浄」5件、「感染防護用具の取り扱い」4件、「医療・衛生材料の入手・保管・廃棄」2件、「うがい」「口腔ケア」「在宅における消毒・滅菌方法」各1件で構成されていた。中項目で最も多かった「手指衛生」は、小項目「手指衛生の有無と方法」4件、「タイミングの認知」、「介護者の手洗いの徹底」各1件で構成されていた。

(2) 医療処置における感染管理

大項目で多かった「医療処置における感染管理」は、中項目「気管内吸引」9件、「人工呼吸器管理」「膀胱留置カテーテル挿入・管理」「経管栄養」各2件、「間欠的導尿」「酸素吸入」「血液透析管理」「CAPDの管理」「長期気管カニューラ挿入」各1件から構成されていた。中項目で最も多かった「気管内吸引」は、小項目「使用済みカテーテル・洗浄水の汚染状況」「吸引前の手指衛生の有無と方法」各2件、「実施方法」「気管内吸引カテーテルの管理方法・交換・汚染状況」「カテーテル管理方法の介護者への介入」「カテーテルの浸透液の汚染状況」「手袋の着用」各1件から構成されていた。

(3) 組織的に行う感染管理

大項目の3つ目に多かった「組織的に行う感染管理」は、中項目「スタッフ教育」10件、「マニュアル」6件、「スタッフの健康管理」2件から構成されていた。中項目で最も多かった「スタッフ教育」は、小項目「スタッフ研修会の開催・参加状況・学習効果」5件、「スタッフ研修会の有無」4件、「評価」1件から構成されていた。

表6 研究内容

大項目	中項目	小項目	文献番号	
感染管理の基礎的技術 (20)	手指衛生 (6)	手指衛生の有無と方法 (4), タイミングの認知 (1) 介護者の手洗いの徹底 (1)	⑥⑩⑰⑳ ④	
		消毒・洗浄 (5)	気管内吸引カテーテルの洗浄・消毒方法の実態 (3) 経管栄養に使用するシリンジの消毒・洗浄効果 (1) 膀胱洗浄器具の消毒・洗浄方法の実態・効果 (1)	⑨⑱⑳ ⑳ ㉑
	感染防護用具の取り扱い (4)	使用の有無 (2), 吸引時の手袋の着用 (1), 実態 (1)	④⑨⑱⑳	
	医療・衛生材料の入手・保管・廃棄 (2)	気管内吸引カテーテルの交換の目安・Yガーゼの取り扱い (1), 経管栄養に使用するシリンジの管理 (1)	⑱ ⑳	
		うがい (1)	介護者のうがいの徹底 (1)	④
	口腔ケア (1)	実施方法・実態・歯垢の汚染状況 (1)	⑨	
	在宅における消毒・滅菌方法 (1)	入浴介助での使用物品の消毒方法の実態 (1)	⑩	
	医療処置における感染管理 (20)	気管内吸引 (9)	使用済みカテーテル・洗浄水の汚染状況 (2) 吸引前手指衛生の有無と方法 (2), 実施方法 (1) 気管内吸引カテーテルの管理方法・交換・汚染状況 (1) カテーテル管理方法の介護者への介入 (1) カテーテルの浸透液の汚染状況 (1), 手袋の着用 (1)	⑱⑳ ④⑨ ㉒ ㉒ ⑨㉒
人工呼吸器管理 (2)			人工呼吸器回路の汚染状況 (1) 人工呼吸器感染管理研修会を開催・学習効果 (1)	⑱ ㉓
膀胱留置カテーテル挿入・管理 (2)			長期留置者のカテーテル管理・経験した困難内容 (1) 研修会の開催・学習効果 (1)	⑳ ⑱
経管栄養 (2)			シリンジの汚染状況・実施方法 (1) 経管栄養セットの汚染状況・実施方法 (1)	④ ③
			間欠的導尿 (1)	実施方法・尿・使用後のカテーテル汚染状況 (1)
酸素吸入 (1)			在宅酸素療法患者の在宅療養に影響する要因 (1)	㉔
血液透析管理 (1)		透析装置や物品の管理・血管穿刺手技 (1)	⑮	
CAPD の管理 (1)		療養者への指導・効果 (1)	⑳	
長期気管カニューラ挿入 (1)		介護者が長期間呼吸器感染を予防できた要因 (1)	④	
組織的に行う感染管理 (18)		スタッフ教育 (10)	スタッフ研修会の開催・参加状況・学習効果 (5) スタッフ研修会の有無 (4), 評価 (1)	①⑦⑧⑩⑪⑱ ⑱⑲⑳⑳
			マニュアル (6)	マニュアルの有無 (4), 記載項目 (1), 評価 (1)
		スタッフの健康管理 (2)	予防接種の推奨・定期健康診断の実施の有無 (2)	⑦⑩
連携・調整 (13)		感染管理に関する在宅療養者・家族への指導 (8)	看護師からの指導 (手指衛生・手袋・マスク着用) 有無 (2) 呼吸器感染予防の実施 (2) 療養者への指導効果 (1), 訪問看護師のケア経験の有無 (1), 感染管理認定看護師の意識 (1) 看護師が求める訪問看護認定看護師の活動 (1)	⑦㉒ ⑳㉑ ⑳㉒ ⑳ ㉓
	各種居宅サービス業者との感染管理に関する連携・指導 (5)		感染症や看護ケアに関する相談先の有無 (2) 利用施設間での保菌情報の共有 (1) 感染症の診断を受けた利用者の有無 (1) 訪問看護事業所と感染管理認定看護師の連携 (1)	⑳⑳ ㉔ ⑦ ㉑
感染症別感染管理 (10)	感染症 (9)		感染症の有無の確認 (5) クロイツフェルト・ヤコブ病の在宅療養管理 (1) MDRP 保菌療養者の感染防止対策・マニュアルの作成 (1), 保菌者の看護ケア時の注意点 (1) 在宅ケアの感染管理に関する文献検討 (1)	⑦⑩⑱⑳⑳ ㉒ ⑭ ⑳ ⑤
		インフルエンザ (1)	介護者・療養者のインフルエンザワクチン接種状況と未接種理由 (1)	⑥
感染管理の基礎的知識 (5)	スタンダードプリコーションズに関する知識 (2)	「基礎的知識」に関する研修会を開催 (1) 研修会の効果 (1)	⑬ ⑬	
		感染源・感染経路に関する知識 (1)	研修会の効果 (1)	⑬
	感染症の治療に関する知識 (1)	研修会の効果 (1)	⑬	
	感染症法に関する知識 (1)	研修会の効果 (1)	⑬	
在宅環境における感染管理 (1)	在宅環境の汚染状況 (1)	透析部屋の汚染 (1)	⑮	

() 内は文献の件数を示す。データは重複回答。

考 察

1. 掲載年次・掲載数について

2007年に医療関連感染という用語が使用されるようになった背景には、高齢者などの免疫低下者の増加、侵襲的医療の発達、在宅医療や長期ケア施設での感染管理の重要性が増したことがあり、2007～2010年にかけての掲載数の増加に影響していると考えられる。峯川¹³⁾は訪問看護ステーションにおける感染予防対策の全国調査を行ない、感染対策マニュアルの整備状況や手指衛生指導状況等を報告している。これは、2007年の医療法の改正に伴い、医療施設の感染対策に関する指針やマニュアル作成の手引きが発行されているが、在宅領域については記されていない¹⁴⁾ことが、在宅の感染管理に係る看護師、研究者らの掲載数が増加した可能性がある。

一方、2011年以降の論文件数が横ばい～減少であった背景には、訪問看護ステーション数の推移が2000年から2007年にかけてほぼ横ばいであったことがあり、日本看護協会が2011(平成23)年に、訪問看護の伸び悩み要因として、高い離職率、処遇の悪さ、新人看護職員教育・育成する体制の不足等を指摘していることから¹⁵⁾、在宅の感染管理に係る看護師、研究者らの研究が進まなかった可能性がある。

2. 研究対象について

前田・滝内・小松¹²⁾の在宅ケアの感染管理に関する研究対象は、「療養者」「医療・衛生材料」「在宅ケア従事者」「家族」が多かった。本研究は「療養者」「医療・衛生材料」「訪問看護師」「家族(介護者)」の順であり、研究対象は同じ傾向であった。このなかで「医療・衛生材料」を対象にしているものが多かったのは、在宅においては医療機関と異なりシステム化していないため注目されていると考える。また、前田らの¹²⁾「在宅ケア従事者」に対して、本研究の対象は看護師に焦点をあてているために「訪問看護師」となっている点が異なっていた。

3. データ収集方法について

本研究では「質問紙調査」によるデータ収集が48.6%を占め、次いで「細菌学的検討」によるデータ収集が22.9%であった。一方、前田ら¹²⁾の研究では「細菌学的検討」によるデータ収集が52.2%で最も多いデータ収集方法であった。この結果は、看護職のみならず、保健・医療・福祉関係職を対象にした研究であり、前田ら¹²⁾が指摘しているように医学系研究者等実験技術をもった研究者が在宅ケアの感染管理に関する研究に着手し始めている背景がある。しかし、本研究の対象は看護師に焦点をあてているために「細菌学的検討」は多くなかったと考える。その理由として、小椋・奥住・矢野³⁾が、病棟で勤務する看護師に対して微生物学の基礎となるグラム染色についてのアンケート調査を行ったところ知識不足が露呈され、現在の看護師には明らかに微生物学の知識

が欠落していることを指摘していることから、「細菌学的検討」によるデータ収集ができる機関が多くない等「細菌学的検討」を行うことが難しいと考える。また、在宅での感染管理は場所が自宅であり、家族が主な実施者であることと、看護の対象が人であることから、看護分野において「細菌学的検討」の研究は多くないと考える。

以上のことより、これまでの在宅の感染管理に関するデータ収集方法として、実態調査を記述する段階の文献が多く、「分析的研究」が少ない傾向にあり、研究課題であると考えられる。

4. 研究内容について

1) 研究内容の大項目

研究内容は感染管理全般に関することが取り上げられていた。

(1) 感染管理の基礎的技術

大項目で最も多かった「感染管理の基礎的技術」では、中項目「手指衛生」が多く占めていた。手指衛生は、HAIを予防するための最も基本的かつ重要な対策として、世界保健機構(WHO)やCDCにおいて強く推奨されている¹⁶⁾。今回の調査結果から、手指衛生の実施状況の確認だけでなく、医療施設での指導状況や未実施理由を把握し、効果的な指導方法の検討を行うことが課題であると考えられる。また、在宅ケア提供者である訪問看護師が手指衛生ガイドラインについての知識を修得できる機会が必要である。そして、在宅ケア対象者である療養者、家族への指導、看護職以外の関連する職種等への教育・普及も課題である。

(2) 医療処置における感染管理

大項目で同数に多かった「医療処置における感染管理」のなかで、「気管内吸引」が多く占めていたのは、筋神経系疾患(難病)患者を対象とする訪問看護分野から、次第に他の訪問看護分野にも研究が及び、感染予防に対する研究が始まったとされる変遷があり¹¹⁾、前田ら¹²⁾の研究に続き、本研究において研究内容として抽出されていたと考える。そして小項目が、使用済カテーテル・洗浄水の汚染状況、気管内吸引カテーテルの管理、介護者への指導方法や介入方法等であり「細菌学的な視点」からの構成となっていたことから、在宅における感染管理の実施方法の確立に向けた検討を行っていることが推測された。先行研究の中には、今後はカテーテルの洗浄や消毒剤の選択等、より簡便な方法へと改善していくこと¹⁷⁾、調査対象を増やし、調査結果を蓄積していくこと¹⁸⁾を課題として指摘するものもある。そのためには、医療施設と連携していくことが求められる。

具体的な方策として、感染に専門的に対応するCNICが、訪問看護師との連携・調整を行っていくことが課題であると考えられる。阿部¹⁹⁾の質問紙による調査によると、訪問看護事業所はCNICとの連携を72.2%が要望してお

り、具体的には相談支援、研修実施等であった。また、CNICの90%以上が訪問看護事業所との連携・介入の必要性を感じていた。しかし、現状では、訪問看護事業所はCNICとの間には業務調整の困難さや、交流がない等の理由から、十分な連携が取れているとは言い難いと指摘している。今後は互いに協同し、看護活動を実践していくことが課題であると考え、さらには、看護職のみならず、関連する職種間の組織的な情報の連携も課題であると考え。

(3) 組織的に行う感染管理

大項目の3つ目に多かった「組織的に行う感染管理」は、「スタッフ教育」「マニュアル」が多く取り上げられていた。「スタッフ教育」はスタッフ研修会の開催、参加状況、学習効果等が取り上げられ、修得状況が低い項目、修得度の評価方法を検討することが課題であると考えられた。先行研究の中には、訪問看護場面での実施状況の観察などの客観的評価を取り入れること²⁰⁾を課題として指摘するものもある。「マニュアル」について、五十嵐²¹⁾は多くの訪問看護ステーションで感染管理マニュアルが整備されていたことを報告している。阿部¹⁹⁾もほとんどの訪問看護事業所でマニュアルを整備していること、しかし、そのうちの半数近くが実践に活かされていないと感じていることや多くが改定したいと感じていることを報告している。このことから、今後は、活用状況や実際の取り組みについて確認していくことが課題であると考え。

結 論

1. 在宅領域での感染管理に関する看護系国内文献は、2007年～2010年にかけて増加傾向であった。2011年～2014年は、2007年と比較して横ばいもしくは減少していた。

2. 研究対象は在宅ケア対象者である「療養者」が27.7%を占めていた。

3. データ収集方法は「質問紙調査」による実態調査の研究が48.6%を占めていた。

4. 研究分類は「観察研究」が75.8%を占めていた。

5. 研究内容は感染管理全般に関することが取り上げられていた。これらの研究内容の蓄積と共に、対象者数を増やしていくことが今後の課題である。

6. 「感染管理の基礎的技術」に関する今後の課題は以下である。

1) 手指衛生の実施状況の確認だけでなく、医療施設での指導状況や未実施理由を把握し、効果的な指導方法の検討を行うことが課題である。

2) 在宅ケア提供者である訪問看護師が手指衛生ガイドラインについての知識を修得できる機会が必要である。

3) 在宅ケア対象者である療養者、家族への指導、看

護職以外の関連する職種等への教育・普及が課題である。

7. 「医療処置における感染管理」に関する今後の課題は以下である。

1) 医療施設と連携していくことが課題である。

2) 感染に専門的に対応するCNICが、訪問看護師との連携・調整を行っていくこと、今後は互いに協同し看護活動を実践していくことが課題である。

3) 看護職のみならず、関連する職種間の組織的な情報の連携が課題である。

8. 「組織的に行う感染管理」に関する今後の課題は以下である。

1) スタッフ教育は、修得状況が低い項目、修得度の評価方法を検討することが課題である。

2) マニュアルについて、今後は活用状況や実際の取り組みについて確認していくことが課題である。

なお、本研究の要旨は第32回日本環境感染学会総会において発表を行った。

利益相反自己申告：申告すべきものなし。

文 献

- 1) 今関孝子, 加藤武史: 手洗い教育における手洗いの有効性やコンプライアンスに関する研究. 医療薬学 2004; 30(2): 129-35.
- 2) 大須賀ゆか: 看護師の手洗い行動に関する因子の検討. 日本看護科学会誌 2005; 25(1): 3-12.
- 3) 形山優子, 山本満寿美, 千田良子, 狩山玲子: 誤嚥性肺炎患者の口腔内の状態と口腔ケアおよび口腔と吸引痰からの検出菌に関する実態調査. 日本環境感染学会誌 2008; 23(2): 92-103.
- 4) 塚本容子, 伊藤加奈子: 肺炎防止のための口腔ケアの研究の動向—2000年から2005年の日本と海外の研究論文の比較から—。北海道医療大学看護福祉学部紀要 2005; 12: 37-44.
- 5) 伊藤未歩, 小森史織, 吉嶺佐知子: 骨髄抑制期にある患者の感染予防意識の実態と看護師の指導内容との相違. 第44回(平成25年度)日本看護学会論文集 成人看護II 2014; 141-4.
- 6) Siegel J D, Rhinehart E, Jackson M, Chiarello L: the Healthcare Infection Control Practices Advisory Committee. Guideline for isolation precautions: Preventing transmission of infectious agents in healthcare settings 2007: <http://www.cdc.gov/ncidod/dhqp/pdf/guidelines/Isolation2007.pdf>. accessed November 26, 2007.
- 7) 鈴木明子, 小林寛伊: わが国の感染制御の歴史. 医療関連感染 2015; 8(1): 1-9.
- 8) 小椋正道, 奥住捷子, 矢野久子: 感染予防を実践できる看護師の育成について—看護教育における微生物学の位置づけを考える—。名古屋市立大学看護学部紀要 2003; 3: 1-7.
- 9) 坂本史衣: カテーテル関連尿路感染予防のためのCDCガイドライン(草案)主な変更点と疑問点. INFECTION CONTROL 2010; 19(1): 76-87.
- 10) 東陽一郎, 苛原 実: 在宅および高齢者施設における感染症管理について. 診断と治療 2014; 102(12): 91-4.
- 11) 川村佐和子: 在宅ケア感染予防に関する文献学的研究 MRSA, 一般細菌を中心に. 看護研究 1994; 27(4): 42-50.

- 12) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子: 在宅ケアの感染管理に関する研究の動向と今後の課題—1992年~2006年の国内文献から—, 日本環境感染学会誌 2008; 23(5): 350-4.
- 13) 峯川美弥子: 訪問看護ステーションにおける感染予防対策の全国調査, 日本環境感染学会誌 2008; 23(5): 343-9.
- 14) 久津見雅美, 内海桃絵: 在宅領域における看護職・介護職の感染対策の実施状況, UH CNAS, RINCPC Bulletin 2016; 23: 141-50.
- 15) 日本看護協会: 訪問看護の伸び悩みに関するデータ, 医療計画の見直し等に関する検討会, 平成23年7月13日.
- 16) 坂本史衣: 手指衛生モニタリング—本当の実施率を把握し改善するには—, 日本環境感染学会誌 2017; 32(1): 1-5.
- 17) 森みずえ: 在宅における気管内吸引カテーテル管理方法に関する長期介入, 北里看護学誌 2010; 12(1): 38-44.
- 18) 矢野章水, 西留美子, 熊谷直子: 在宅神経難病患者の家族の気管内吸引に関する退院指導の認識と実際, 共立女子短期大学看護学科紀要 2010; 5: 47-55.
- 19) 阿部亜矢子: 在宅ケア関連感染予防の現状と感染管理認定看護師の役割, 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要 2014; 19: 9-16.
- 20) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子: 訪問看護師を対象とした「手洗い・うがい」研修会の効果検証, 日本環境感染学会誌 2008; 23(1): 41-7.
- 21) 五十嵐久人: 訪問看護ステーションにおける感染管理対策の現状と課題, 山梨大学看護学会誌 2010; 8(2): 39-44.
- 22) 小松妙子, 滝内隆子, 前田修子: 訪問看護従事者の感染管理に関する学習の現状と要望—学習機会, 所属機関, 訪問看護経験年数による比較—, 日本環境感染学会誌 2007; 22(1): 41-5.
- 23) 前田修子, 滝内隆子, 水島ゆかり, 中山栄純, 浅見美千江: 「在宅における感染管理に関するマニュアル」の内容に関する評価, 日本在宅ケア学会誌 2007; 10(2): 91-8.
- 24) 工藤朋子, 井上都之: 在宅経管栄養注入ルートの洗浄, 消毒に関する細菌学的検討, 岩手県立大学看護学部紀要 2007; 9: 97-101.
- 25) 田嶋ひろみ: 長期気管カニューレ挿入在宅療養者の呼吸器感染を予防できた要因—家族介護者の介護行動とそれに影響及ぼした因子—: 第39回 地域看護2008年, 2008. p. 30-2.
- 26) 五十嵐久人: 在宅療養者を介護する介護者の日常生活援助における感染対策行動, 山梨大学看護学会誌 2008; 6(2): 25-30.
- 27) 森みずえ, 千田好子, 光畑律子, 狩山玲子: 気管内吸引を必要とする長期在宅療養患者に対する感染管理と口腔ケアの実態調査, 日本環境感染学会誌 2009; 24(1): 27-35.
- 28) 村井貞子, 山口綾子, 峯川美弥子, 美ノ谷新子: 訪問介護と訪問入浴介護における感染症と感染予防の全国調査, 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要 2009; 14: 1-7.
- 29) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子: 訪問看護師を対象とした感染管理の連携・指導に関する研修会の評価, 日本在宅ケア学会誌 2009; 13(2): 85-92.
- 30) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子: 訪問看護師を対象とした「膀胱留置カテーテル挿入・管理」感染管理研修会効果検証, 日本環境感染学会誌 2009; 24(6): 417-24.
- 31) 滝内隆子, 前田修子, 小松妙子: 訪問看護師を対象とした「感染対策に関する基礎的知識」研修会の効果検証—研修前後の修得状況を通して—, INFECTION CONTROL 2009; 18(12): 1312-21.
- 32) 吉川幸子, 大井登美子, 中野貴美子, 二藤紀子, 葛澤朋未, 石黒浩史, 他: 在宅MDRP保菌療養者の感染防止対策—マニュアル作成の試み—, 癌と化学療法 2009; 36(1): 138-40.
- 33) 鶴飼浩子, 小林寛伊, 大久保憲, 比江島欣慎: 在宅血液透析患者の透析環境について, 医療関連感染 2009; 2(2): 81-5.
- 34) 小長谷百恵, 岡田 忍, 西尾淳子: 在宅人工呼吸器使用中の療養者の気管内吸引カテーテルの管理方法について—細菌学的なデータに基づく研究—, 日本難病看護学会誌 2009; 13(3): 219-29.
- 35) 吉澤紀美, 田辺文憲: 在宅患者の再利用する気管内吸引カテーテルの細菌汚染の実態, 山梨大学看護学会誌 2010; 8(2): 7-12.
- 36) 池田由紀: 慢性呼吸器疾患患者の呼吸器感染予防の認識についての検討, 日本感染看護学会誌 2010; 6(1): 27-35.
- 37) 久留清美, 丸山泰世, 松浦奈緒, 鶴飼由香, 山田文子, 宮木祐輝: 在宅に於ける代用膀胱洗浄器具の煮沸消毒中止への検討, 日本看護学会論文集 地域看護 2010; 40: 32-4.
- 38) 小松妙子, 前田修子, 滝内隆子: 訪問看護師対象の感染管理に関する在宅人工呼吸器研修会への参加効果, 日本環境感染学会誌 2011; 25(1): 41-8.
- 39) 前田ひとみ, 南塚貴美代, 矢野久子: 訪問看護ステーションにおける耐性菌感染症並びに看護ケアの実態と課題, 日本環境感染学会誌 2011; 26(5): 285-92.
- 40) 古林千恵, 矢野久子, 尾上恵子, 脇本寛子, 脇山直樹, 畑直樹: 上部尿路感染予防のための清潔間欠自己導尿の実践と継続指導 チェックリスト作成, 日本環境感染学会誌 2012; 27(6): 412-8.
- 41) 西田幹子, 玉城久美子, 内山あやな, 緒方志保, 宮本圭奈美, 西海真理, 他: 外来における在宅腹膜透析患者の看護介入方法の検討, 日本小児腎不全学会雑誌 2012; 32: 205-7.
- 42) 山田正実, 平澤則子, 飯吉令枝: A地域における慢性閉塞性肺疾患患者のヘルスケアニーズに関する予備調査, 日本在宅ケア学会誌 2012; 15(2): 45-52.
- 43) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子, 河野由美子, 久司一葉: 長期間膀胱留置カテーテル管理における訪問看護師の困難経験, 日本在宅ケア学会誌 2012; 16(1): 68-75.
- 44) 石川りみ子, 玉城久美子, 宮城裕子: 鳥しょに居住する在宅酸素療法患者の在宅療養に影響する要因と支援体制の検討, 日本呼吸器ケア・リハビリテーション学会誌 2013; 23(1): 103-10.
- 45) 根城しずか, 杉山美妃子, 出町知美, 井上智佳, 母良田郁子, 古川照美: 在宅における経管栄養に使用するシリンジの洗浄・管理方法, 保健科学研究 2014; 4: 11-6.
- 46) 大橋晃太, 上笹 宙, 鈴木崇弘, 木之本景子, 村上義彦, 伊藤寿朗, 他: 病診連携・医福連携によって病状進行から看取りまで在宅医療でサポートした孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病の1例, 癌と化学療法 2014; 41(1): 78-81.
- 47) 金沢美弥子, 沖田登美子, 高崎多恵子, 福原香奈子, 岩永房子, 片山清美: 看護師における認定看護師の認知と利用状況の経年的変化, 第44回 日本看護学会論文集 看護管理 2014年 2014; 305-8.

〔連絡先〕 〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46
 武庫川女子大学大学院看護学研究科 徳重あつ子
 E-mail: tokusige@mukogawa-u.ac.jp]

Research Trends on Home Infection Control from Nursing Domestic Literature 2007-2014

Hikari SHIMA¹⁾, Atsuko TOKUSHIGE²⁾, Keiko YOKOJIMA²⁾ and Kaoru KUYAMA²⁾

¹⁾*Master Course of Former Mukogawa Women's University Graduate School of Nursing,*

²⁾*Mukogawa Women's University Graduate School of Nursing*

Abstract

The 2007 CDC guidelines changed the term “nosocomial infection” to “healthcare associated infection,” recognizing the increased importance of infection control at home and in care facilities. Also, in the medical law revised in the same year, although a nosocomial infection management structure was implemented, adoption was not carried out in homes. Therefore, in this research, we examined the trend of research on home infection control in nursing domestic literature and decided on future topics. Between 2007 and 2014, using the Medicine Central Journal and CiNii, keyword searches for “home” and “infection management,” “infection prevention,” “infection control,” and “infection measures.” Word combinations were performed, along with a theme search in the thesaurus using “at home” and “infection control” word combinations. From the extracted literature, 33 papers, excluding reviews and commentaries, conference proceedings were selected with consideration of the publication year, the number of publications, research subjects, data collection methods, and research contents. The number of papers was one to eight per year, with eight in 2009 (24.2%) being the highest, and the research subjects were 27.7% “home care patients.” The data collection method was 48.6% “questionnaire survey,” and 75.8% “observational study.” The research topics are “fundamental techniques of infection control,” “medical treatment infection control,” and “Organizational infection control.” In the future, it will be necessary to increase this research and the number of topics.

Key words: home, infection control, review of literature